志賀直哉私論

志賀直哉私論

定価　一〇〇〇円

昭和四三年一一月一日　第一刷

著者　安岡章太郎

発行者　上林吾郎

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三　電話二六五―一二一一

印刷　大日本印刷

製本　中島製本

製函　加藤製函

万一落丁乱丁がありましたらおとりかえします

© 1968 Shotaro Yasuoka

目次

志賀直哉私論
「暗夜行路」その背景
二つの自我　31
下谷根岸お行の松　73
都市と農村　105
風土的拒否反応　123
風土と思想　165
私小説の成立　199
暗夜行路後篇　233
補遺　285
友情と肉親　287
志賀直哉訪問記　337

装幀　杉田豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

志賀直哉私論

「暗夜行路」その背景

生涯かかつて自伝を書きつづるのが私小説作家の仕事だ、といふ説がある。いまその流儀で志賀直哉の作品をながめてみると、私の眼は遠いものほど大きく、近くのものほど小さくうつる望遠鏡を覗いたやうになつてしまふ。時代をへだてた幾人もの人間の顔が、同じ平面のうへに重り合ひ、一番うしろに置かれた顔が一番大きく、つまり偉大な印象で浮び上つてくるのである。

作品のなかの人物が、そのまま作家の人格に溶け合つて、作品を論じることが作者の人物論になるのは、私小説を長い長い自伝の断片として読む場合、避けられないわけだが、さうなると私は自分の眼を、この逆遠近法の仕掛けにダマされることのないやうに、絶えず気をつけてゐなくてはならないだらう。

しかし、自分より遠くのものほど大きな存在になつて感じられるといふのは、はたして私たちの眼

の錯覚にすぎないのだらうか。たしかに、われわれの眼はダマされやすい。しかし、それはいくつかの条件、いくつかの原因が重り合つて錯覚を起してゐるはずで、その一つだけを警戒しても仕方がない。いま自分の眼に大きくうつるものがあれば、それを大きいものだと考へた方が、かへつて間違ひは少いのかもしれない。

ところで志賀直哉氏は、「内村鑑三先生の憶ひ出」といふ文章のなかで、自分に最も影響を与へた尊敬する人物として、武者小路実篤、内村鑑三、及び祖父の直道を上げてゐる。この三人は、それぞれ志賀氏にとつて最も身近な人たちであるが、なかでも祖父直道は直哉が二十四歳のとしに亡くなるまで、ほとんど密着した存在であつた。その祖父を、尊敬する三人のなかの一人に数へてゐるのは、志賀氏には逆遠近法の望遠鏡などは存在しなかつたか、さもなければ直道といふ人がよくよく偉い人物だつたからであらう。もつとも、この文章が発表されたのは昭和十六年、直道の死後三十五年もたつてからであるから、すでに充分遠い人になつてゐたといはなければならない。しかし志賀氏がどれほど祖父に親近感を持つてゐたかは、若いころから最近にいたる数多くの作品で祖父に触れてゐることからも容易に察しられる。処女作「或る朝」の書き出しは、《祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寝床で小説を読んで居ると、並んで寝て居る祖母が、「明日姉さんのおいでなさるのは八時半ですぞ」と云つた。》といふところからである。そして、この作品から約五十年たつて昭和三十一年に発表された中篇小説「祖父」は、この作家のほとんど最後の仕事といつてもいいであらう。いはば志

賀直哉の文学活動は祖父への法要からはじまつて、その追憶にをはつてゐるといへるのである。

《私は祖父を尊敬した。私は肉親といふ私情を除いても、自分の此世で出会つた三四人の最も尊敬すべき人の一人として祖父を尊敬してゐる。それ故、『暗夜行路』の主人公の祖父には此祖父と思ひきり類似点のない人間を書かねば気が済まなかつた。当時我孫子で自家に出入してゐた植木屋の親爺をモデルにした。昔は所謂好男子であつたらうといふやうな老人だつた。その為め身を持ちくづし、今は息子に使はれてゐる。さういふ意気地ない老人、――私はこの老人を嫌ひだつた。――それを頭に置いて書いた》（昭和十三年「続創作余談」）

作中人物とそのモデルとの関係は、ここに述べられた通りであらう。身を持ちくづして老いこみ、息子の下働きをして食はせてもらつてゐる〝色男の末路〟のやうな植木屋は、志賀氏の実際の祖父君とはまつたくの別人であるにちがひない。しかし、そのやうな〝祖父〟を、なぜここに登場させる必要があつたのだらう――？　よく知られてゐるやうに「暗夜行路」は最初「時任謙作」といふ純然たる私小説として書かれるはずであつた。夏目漱石からの依頼で東京朝日新聞に連載する予定で、大正元年から取りかかり三年の夏までかかつて書いてみたが、どうしても書けずに、つひに朝日連載を断わつた。これについて志賀氏は、やはり「続創作余談」のなかで、《「暗夜行路」の前身「時任謙作」は永年の父との不和を材料としたもので、私情を超越する困難が、若しかしたら、書けなかつた原因

であつたかもしれない。然し間もなく私は「和解」といふ小説に書いたやうな経緯で、大変気持のいい結果で父と和解した。和解してみれば「時任謙作」といふ小説に対する私の気持は変化して来た。（略）長篇を書きたい気はあつても、今までの主題には興味がなくなつて来た。》といつてゐる。

若い作家（このとき直哉は数へ年三十歳）が、漱石のやうな大家に言はれて新聞小説を書きはじめるときの緊張感は、私にも想像出来ないものでもない。おそらく、その緊張感だけでも志賀氏にとつて相当の重荷であつたらう。まして、その主題が永年の父との不和を材料としたものとあつては、書きづらいのはあたりまへである。当時の新聞小説がどのやうな読まれ方をしてゐたか、私にはわからないが、とにかく毎日、各家庭に直接配られるものだから、志賀氏の親戚一同は、直哉が書いてゐるといふだけでも、その父子の不和を描いた小説に眼をとほすだらう。当の父君の直温氏の困惑は言ふまでもない。「朝日」といふ代表的な新聞は、息子の小説が連載されてゐる期間だけにしても、まつたく無視するわけには行かず、しかも実業家として幾つもの会社の役員を兼ねてゐる人だけに附き合ひもひろく、その交際範囲にある人たちが好意悪意を取り混ぜて、息子が新聞に書いてゐる小説に興味をもち、その眼で直温氏を眺めるといふことも当然かんがへられる……。直哉氏にしても、この小説で父君を自分の手で世間的なスキャンダルの渦中に投じる結果になつてしまつては、父子の対立もこれまでとは様相が変り、自分プラス新聞（世間）対父親の争ひになつて、結局圧制的で無理解な父親を裁く息子としての立ち場を失ふことにもなるだらう。さうした悩みを氏は「和解」のなかで、次のやうに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

述べてゐる。

《自分は自分の仕事の上で父に私怨を晴らすやうな事はしたくないと考へてゐた。それは父にも気の毒だし、尚それ以上に自分の仕事がそれで穢されるのが恐しかつた。》（傍点筆者）

勿論、これ以外にも、この家庭内の不和を材料にした小説を書き悩む理由はいくつもあつたであらう。《其作物の発表が生む実際の悲劇を考へると、自分の気分は必ず薄暗くなつて行つた。殊に祖母との関係の上に投げる暗い影を想ふ時に、自分は堪らない気がした。》（「和解」）といふことも本当だらう。この場合志賀氏の顧慮のなかにいくらか家族主義的エゴイズムの臭ひもしないでもない。しかし、いづれにしても志賀氏が発表の舞台に新聞といふ公器的な性格の紙面をあたへられたことで、〝私小説〟に文学としての限界を超えた或る何かがあることを悟らされたはずである。それまで志賀氏は、その作品をほとんど同人雑誌「白樺」に発表しつづけてきた。唯一の例外は「大津順吉」を「中央公論」に出したことで、「朝日」からの原稿依頼は、この「大津順吉」の発表のすぐあとからやつて来た。おそらく志賀氏は「大津順吉」の成功を見て、それと同系統の「時任謙作」を「朝日」にのせようと考へたのであらう。発表の舞台が俄かにこのやうに拡がつてみると、作家はいまさらのごとく自分の読者を自分では選べないといふことに気がつくはずである。無論、本質的にいへば、同人雑誌であらうと新聞であらうと、変りがあらうはずがない。活字で発表されたものは誰がどんな読み方をしようと、作者にはそれを拒む権利も手段もない。ただ実際上は、千部か二千部程度の同人雑誌と、何

十万（いまは何百万だらうが）の発行部数をもつ新聞とでは、読者の質も、その読まれ方も、いちじるしく異つてくる。文学として書かれた私小説も、新聞の三面記事を読む人たちの眼には、長篇の「身上相談」として受けとられかねないし、さうなつた場合には、読者の声が小説のなかに起つてゐる事態そのものも改変してしまふ力を発揮するだらう。小説の内容が〝私〟に即してゐればゐるほど、この力は現実的な強さではたらきかけてくるし、それによつて〝私〟が迷惑をかうむることは仕方がないにしても、〝私〟の身辺にある者の受ける被害の責任は結局、作者である〝私〟が負はなければならない。これは文学外の責務である。

文学者が自己の文学的使命を達成するために、かうした文学外の責務を免れられるものか、どうか――？　いまそれを論じる余裕はないが、志賀氏がこれについてどう考へたかは、志賀氏が後に島崎藤村の態度を劇しく非難してゐることを考へ合せて、興味がある。

《今から云へば二十何年か前、島崎藤村が「破戒」といふ小説を書きつつあつた時、どんな犠牲を払つても此為事を仕上げる決心で出来るだけ生活を縮小し、家族達はそのため栄養不良になり、何人かの娘が一人々々死んで行く事を書いた事がある。私はそれを見て、甚く腹を立てた。「破戒」がそれに価する作物かと云ひたくなつた。何人かの娘がその為め死ぬといふのは容易ならぬ出来事だ。「破戒」が出来る出来ないの問題どころではないではないかと思つたものだ。》（「邦子」）この文章は、志賀直哉を論じた多くの人に引用され、「志賀氏は芸術よりも生活を重んじる人だ」といつた結論がみち

びき出されてゐるやうだ。私自身は志賀氏を必ずしもそのやうに考へてはをらず、この文章にしても、芸術を生活の上におくことに反対したものとは思はない。要するに志賀氏は藤村を嫌ひ、その作品にあまり高い評価をあたへてゐないといふまでのことだ、といふ気もする。この文章で志賀氏が腹を立ててゐるのも、藤村が「破戒」を書くにあたつて娘が餓ゑ死にするほど貧乏したといふことに対してではなく、《何人かの娘が一人々々死んで行く事を書いた》といふそのことに対してではないか。手柄顔に、或ひは殊勝げに、自分が小説を書きつつある傍らで、娘が餓ゑで死んで行くことを文章に綴つて公表する、そこには功成り名遂げた芸術家のナルシシズムの臭味が感じられないでもない。志賀氏のカンに触れたのも、おそらくそのやうな小説家の好い気なナルシシズムの臭ひに就いてである。

藤村のその文章といふのは、たぶん「家」の続篇で「犠牲」といふ題名で発表されたもののことであらう。年譜によれば、それは明治四十四年のことであり、志賀氏が「暗夜行路」の前身、「時任謙作」を書き出す一年まへに当つてゐる。「家」は、その年の暮れに上下二巻の単行本になつて出版されてゐるが、「時任謙作」を書き悩んでゐた志賀氏が、それを読んで腹を立てたといふことは、大いに有り得るだらう。作家の競争意識、そんなものも働いてゐたかもわからない。何にしても「家・犠牲」の藤村を否定しながらでは、「時任謙作」で自分の父親との対立を事実アリノママのかたちで書きつづけることは難しくなるわけだ。

「暗夜行路」が雑誌「改造」に連載されはじめるのは大正十年新年号からで、「時任謙作」を書き出してから十年目である。もつとも、その序詞の部分は「謙作の記憶」といふ題で大正九年新年号の「新潮」に発表され、前篇最終章は「憐れな男」といふ題で大正八年四月号の「中央公論」にのつてゐるから、実際にはそのころから「暗夜行路」は書き出されてゐたわけだらう。――「時任謙作」が「暗夜行路」にかはつた直接の動機は、まへに上げた志賀氏の文章に述べられてゐるとほり、大正六年、つまり現在の「暗夜行路」が書き出される二年まへに父親との和解が成立したためである。

これによつて、父子の対立といふ「時任謙作」の主題は、それを主張する立ち場を失ひ、それに代つて作者自身の前半生からは意外な結末ともいふべき「和解」といふ作品だけが残つた。そして実際は「時任謙作」のなかで取り上げられるはずだつた主題は、「或る男・その姉の死」といふ虚構小説として書かれた。――渡瀬川鉱毒の問題で父と衝突した主人公が、自己の主張をつらぬき得なかつたために発狂するといふこの小説については、後に述べることとして、このテーマが「暗夜行路」に生かされなかつたのは、父君との和解が成立したからに違ひはないが、その和解はじつは志賀氏が、このテーマに興味を失ひさうになつてゐたから成り立つたのかもしれない――。それはさておき、何年間も格闘してつひに書き上げられることのなかつた「時任謙作」の原稿は、その何割かが「暗夜行路」の描写の部分に用ゐられた。よく知られてゐるやうに「暗夜行路」の主題は、父親の外遊中に祖父と母との間に生れた主人公が、その出生にまつはる暗い影に苦しめられ、また結婚後は妻の不義によつ

て主人公の父親と同じ苦しみを味はされ、いかにしてそれらの苦悩を克服して行くか、といふ話である。この小説を、一個の人格形成の物語として読む者と、主人公の人間的成長はアヤフヤなもので、じつは単なる心境小説の短篇の羅列であるに過ぎないとする者と、評価も解釈もさまざまであるが、とにかくある時代、或る階層の人間を、感受性の面から決定的に描き出したといふ点で、この作品が現代の日本の文学の最高頂点の一つであることは異論のないところだらう。そして、その感受性の描出といふのが大部分、主人公の観た女や男や風景やの描写にかかつてゐるものだとすると、「時任謙作」は主題をスゲかへられたまま、現代に生き残つたといふことになる。

このことから二つのことが考へられるだらう。一つは、小説の主題といふものは、すくなくとも志賀文学の場合、大して重要な意味がない、重要なのは作家の感性と描写力だといふこと、これは志賀直哉否定の文学論に有力な根拠をあたへてゐる。しかし、或る小説の描写部分が、主題の異つた他の小説のなかに、そのまま移し変へられるものだらうか。一個の人間の内部で、意志と感情とが完全に切りはなされて別々の動きをするものだとしたら、これは可能である。だが、そんなことは有り得ないとすると、もう一つの考へ方が出てくる。つまり「暗夜行路」も「時任謙作」も、じつは同じ主題である、といふことである。そして私は、いま後者を採つて考へる。

「時任謙作」も「暗夜行路」も、主題は同じく父子の対立である。ただ、対立の原因が、前者では社会道徳や資本主義の在り方といつたことについての思想上の相剋が考へられてゐたのに、後者ではそ

の対立がもつと運命的な、肉体的なもの、端的な嫉妬から生じてくるのだといふふうに考へられる。——これは勿論、「時任謙作」のテーマが「或る男・その姉の死」のやうなものだつたとしての話である。そして志賀氏がこのテーマを捨てたのは、自分たち父子の対立の原因が、実際は思想よりもさきに肉体的な反撥があつたからだと考へたからだ。ただ、この反撥の理由が何であるかは、志賀氏自身にもよくわからないことだつた。或ひは、わかりたくないことだつた。ここから志賀氏の頭の中には、いろいろと恐ろしい空想が、想ひがけないときに、想ひがけないかたちで浮び上つてくる。

《所で話がとぶが、前に尾の道で此長篇を書きつつあつた頃、讃岐へ旅行をして屋島に泊つた時、寝つかれず、色々と考へてゐる内に、若しかしたら自分は父の子ではなく、祖父の子ではないかしらといふ想像をした。私が物心つかぬ頃、父は釜山の銀行へつとめてゐた事があり、又金沢の高等学校の会計課につとめてゐた事があり、しかも其時私の母は東京に残つてゐた。それに、私が十三の時に三十三で亡くなつた母の枕頭で、祖父が「何も本統に楽しいと云ふ事を知らず、死なしたのは可哀想なことをした」と声を出して泣いた。父は其時泣かなかつた。此印象は後まで私に残つてゐて、父に対する反感になつてゐたが、自分が若しかしたら祖父の子ではないかしらと云ふ想像をすると、かういふ記憶が急に全く別の意味をもつて私に甦つて来た。》

《十六歳で嫁入つて来た私の母は、父一人で、子のなかつた祖父母には本統の娘のやうに愛されてゐたのだ。「母の死と新しい母」といふ小説にも書いたやうに祖母は母の死後、いつまでも私と一緒に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com